

文化芸術部会 意見要旨

■ 検討テーマ（1）板橋らしい文化

委員意見

（評価）

- 自然と歴史と文化、絵本のまちなど、今あるものを活かして、伸ばしていく取り組みは評価できる。
- 区立美術館は「絵本」を通じて、イタリア・ボローニャとのつながりを構築しており、評価できる。
- 区立美術館は館所蔵の江戸美術と、板橋区の宿場町の特色と融合した展覧会を行っており評価できる。
- 板橋区出身、ゆかりのアーティストの活躍を支援することは評価できる。

（課題・意見）

- 文化芸術は活動そのものが区民の生きがいであり、生活の一部である。したがってその成果がまちの活性化に繋がるものと捉えていくことが重要である。
- 多様な文化芸術活動がある中で、すべての人が自由に活動できる環境を提供する必要がある。そのために各活動を把握し、共有し、支援が必要。
- 「板橋らしい文化芸術」として、個別の文化芸術を支援する場合は、区内全体の文化芸術のバランスや支援方法を考えることが必要。
- 板橋区には文化芸術における魅力が多数あるが、それぞれ別々に点在しているため、分野横断的に発信を考えていくことが必要。
- 施策に具体性を持たすために、区内の文化芸術資産を細分化し、活用方法を考えることが必要。
- アーティストによる「鑑賞する文化」、区民が披露する「区民が演じる文化」があるが、区民が主体となる「区民が演じる文化」の充実も必要。
- 教育、福祉、観光などの関係分野と連携して取り組むことが必要。
- 文化芸術活動や鑑賞ができない人の実態を把握し、誰もが参加しやすい環境を整えることで全体の参加者を増やすことが必要。
- 文化芸術振興ではキュレーション（展覧会の企画・構成・運営など）が重要。区職員だけでなく、専門分野の識者に意見をもらうことも必要。
- 区内 18 地域センターごとに行われているイベントや町内ごとの「まつり」や年中行事等を見守ることも大切である。

- 文化活動は民間主導で板橋地域、志村地域など、地域センター単位で特色のある取り組みを行い、小さいエリアでの活動が、徐々に広がることが望ましいと考える。
- 区立美術館における地域芸術家支援が必要。
- 美術館・郷土資料館のリニューアルの活用方法を検討するとともに、郷土芸能・文化財の認知度向上へ取り組むことが必要。また史跡公園の整備に伴う加賀の魅力発信方法も検討が必要。
- 新しくなる中央図書館には、板橋の魅力を発信する役割を担ってほしい。また区内に点在する魅力を、横断的に繋げる役割としても期待している。
- 伝統工芸は後継者不足による継承問題がある。区では伝統工芸などを教育の一環として学ぶが、継承に繋がる発展がない。例えば伝統工芸は歴史的、美術的価値があり、美術館展示などで価値あるものとして展開し、板橋区のブランド化に繋げていくことで、若者が伝統工芸への関心を持つきっかけとなるのではないかと。また、区は伝統と若者が求めるものを把握し、ハブの役割を担うことが必要。
- 「絵本のまち」は、絵本を軸にしたどのような展開を目指すのか示すことが必要。また絵本をきっかけとして、歴史ある伝統文化と、新しい文化芸術が会う場として、新たな創造のきっかけとすることはどうか。また「絵本のまち」などの子どもが活躍できるテーマを活かし、子どもが主体的に区と関わり、実感が得られる機会とすることが必要。
- 区内に点在する魅力を、横断的につなげる必要がある。例えば美術館展示に並行して、文化会館、郷土資料館、小中学校でのワークショップなど各所イベントを開催し、区全体での展開が必要。またそれらをバラけさせずに、まとめるキュレーター（展覧会の企画・構成・運営などをつかさどる専門職）の役割を区が担う仕組みが構築できると、区全体として、文化芸術に造詣が深いイメージが定着するのではないかと。
- 中央図書館リニューアルオープンを機に、新たな文化芸術情報の発信源とすることはどうか。それにより、文化芸術振興を区民が想像しやすい、文化会館と中央図書館という象徴をより際立たせていくのではないかと。
- 伝統工芸の継承として、広く知ってもらうことが重要。そのために、文化会館や美術館での常設展示、また、区民参加型の事業など、体験を通じた魅力発信が重要。

■検討テーマ（２）文化芸術活動の場

委員意見

（評価）

- 文化芸術活動の場として、アウトリーチ事業（出前講座）など文化芸術活動の裾野を広げる取り組みは評価できる。

（課題・意見）

- 文化会館は老朽化が進み、音漏れによる利用制限もあるうえ、利用率の減少という課題も抱えている。施設改善を行い、安心・安全に利用できる環境にすることで、活動の場や鑑賞機会の拡大につながり、利用者の増大も見込める。
- 文化会館は多くの方が利用する場であり、また多くの芸術家が利用している場でもある。今後は、利用者層や利用方法などのデータ収集、区内で活動する芸術家の把握など、文化芸術情報の管理が必要である。同時に、文化会館を情報発信の拠点として活用することや、近隣商店街と連携するなどの事業 PR を進めることも求められる。
- 文化施設のバリアフリー化を推進していく必要がある。点字案内やエレベーターのスペース拡大を行い、音声案内ガイドを活用するなどハード・ソフト両面から施設改善を行うことで、障がいの有無や年齢、性別に関わらず、誰もが文化芸術活動を行える環境を整備していくべきである。
- 新たな文化芸術活動の場の創出が必要である。既存の文化施設に限らず、公的空間や屋外施設などを活用することで、区内芸術家の活動の場を増やしていくのはどうか。さらに、地域の特性を生かし、それぞれに小規模なホールなどを整備することで、コロナウイルス感染症により大規模イベントが開催できないような場合でも、柔軟な文化芸術活動の実施が可能になり、同時に地域に根付く文化の創出にもつながる。
- 区民主体の文化芸術活動機会を創出するためには、文化施設など活動できる場所の認知度向上が求められる。民間の力を活用するなど、周知の方法を検討していくべきである。
- 文化施設の空室について、状況に応じて低価格で提供することで、活動の場の提供、空室解消、地域の身近なイベント開催など各方面への利益となる取り組みができるのではないか。
- 文化芸術活動の場として、区の文化芸術拠点である文化会館をどのようにしていくか具体的な検討が必要。

■検討テーマ（３）文化芸術にかかる情操教育

委員意見

（評価）

- 板橋区は芸術として認められた「絵本」が、海外をはじめとして多数集まっており、これは板橋区の信頼の積み重ねによるものと評価ができる。また子どもが親しめる「絵本」を通じて芸術や多文化に触れる機会を独自に創出ができることは貴重である。
- 絵本事業は子ども目線で絵本展示や、絵本の読み聞かせ、美術館との連携などの工夫がみられ、また子どもの視点も踏まえた地域イベントとして推進していると評価できる。

（課題・意見）

- 文化芸術は心を豊かにするもので、情操教育として鑑賞の場、体験の場の充実が求められる。既存の取り組みだけでなく、コロナ渦なども踏まえた新たな場の創造も必要。
- 文化芸術振興の方法として、学校教育に盛り込むことが効果的だと考える。アーティストがアウトリーチ事業（出前講座）など、子どもたちの教育に関与していく取り組みを自ら考えていくことも必要であり、また実施するにあたっては区や学校が支援できる仕組みや環境整備が必要。
- 子どもと文化芸術の結び付けとして、美術展示や演目披露だけでなく、ワークショップや参加型イベントを連携して行うことで、子供たちが興味や関心を持つきっかけとなるのではないか。
- 障がい者による演劇を小中学校で行うことで、文化芸術振興とともに、子どもと障がい者の交流機会の創出につながり、相互理解の場として有意義であった。

■検討テーマ（４）障がい者の文化芸術推進

委員意見

（課題・意見）

- 障がい者と文化芸術の接点をどのようにつくるかが課題。接点のきっかけとして、障がい者視点で「仕組み」「情報提供」「アドバイス」が重要。例えば、専門的知識や経験を有するアーティストの紹介や、バリアフリー対応の貸施設、補助制度などを一体的に案内することで、「やってみよう」と思えるところまでサポートできるとよいのではないか。
- 区が実施している事業については、障がい者及び支援団体を交えて検討。
- 障がい者に対応する事業実施をする上で、集客からイベントの開催まで、実務的な知識や経験が重要になってくる。そうした知識や経験を伝える講座などがあってもよいのではないか。
- 「障がい者の文化芸術」という発想から、「文化芸術の障壁をなくす」という発想に転換していったらどうか。誰でも参加できる芸術活動の取組みを推進してはどうか。「障がい者の」という言葉で対象を限定するのではなく、性別や年齢、国籍や障がいの有無など関係なく、誰でも参加できるという方向性で進めていくとよいのではないか。
- 文化芸術振興においては、「共生」の意識が大切ではないか。また文化芸術への関わり方は、多様であってよいと考え、あるべき論ではなく、何ができるか、どう関わっていくかという視点も踏まえて考えていくべき。
- 障がいのある文化芸術活動家は、障がいの有無は関係なく取り組んでいる方が多く、「障がい者」として配慮することが望ましくないことも踏まえて考えることが必要。
- 障がい者による演劇を小中学校で行うことで、文化芸術振興とともに、子どもと障がい者の交流機会の創出につながり、相互理解の場として有意義であった。
- 障がい者の文化芸術推進については、区としての方針や考え方を示した上で、区民が理解して、一体的に取り組んでいくことが必要。
- 障害者における文化芸術推進の論点を追求することの難しさがある。そうしたときに「文化会館」という全員が共通認識することができ、文化芸術を発信する場として、バリアフリー等を積極的に取り組みことで文化芸術振興、共生推進として重要な建物になるのではないか。
- 文化施設のバリアフリー化を推進していく必要がある。点字案内やエレベーターのスペース拡張などハード・ソフト両面から施設改善により、障がいの有無や年齢、性別に関わらず、誰もが文化芸術活動を行える環境を整備していくべきである。また公演のバリアフリー化の推進も必要。方法としては、視覚障がい者に対応した音声ガイドなどを付帯設備とすることで、各団体が利用できる環境をつくることで、バリアフリー非対応公演がバリアフリー対応の公演になるきっかけとなるのではないか。
- 多くの人が参加しやすい環境が必要であり、例えば、文化芸術活動に関する点字の情報案内や、PDF ファイルの音声読み上げ対応など、そうした取り組みにより、多くの人が参加できるようになる。

多文化共生部会 意見要旨

■検討テーマ（１）板橋らしい国際交流

委員意見

（評価）

- 板橋区が行っている国際交流事業について、一つの区がこれだけの事業を行っているということは評価できる。
- 平成 30 年度に行った「板橋区海外姉妹友好都市紹介イベント」のなかで、企画展示を Google ストリートビューで公開するという試みを行ったが、再生回数が 15,687 回という数字だったことは素晴らしい。
- 交流都市が 23 区内最多の 5 か国という点は非常に評価できる。国際交流は世界平和につながるもので、重要である。
- 市（区）民交流に関して、交流後も、パネル発表やスピーチを行うなど、広く区民に周知するように取り組んでいる。

（課題・意見）

- 海外から板橋区に来る外国人は、生産年齢人口が多い。自分の子どもが学校に通う世帯か、自分がその社会で働いているか等で、社会との関わり方が変わる。今後は「仕事」という側面での交流を考えていき、起業等を支援できれば、外国人が板橋区の雇用を生み出し、地域経済の担い手になってもらえると考える。
- 外国人とともに仕事をし、ともに生活するという多文化共生の新たなステージに入ってきていると感じる。外国人は「お客様」ではなく、同じ板橋区民である。事業については、わざわざ外国人のために用意するのではなく、日本人が普段活動している中に、外国人が入っていければよい。
- 日本人の側から、外国人の生活が見えていない部分が多いと感じる。外国人の生活の実態を、日本人が理解できる仕組みづくりが必要だと考える。
- 事業を行う際は、小さな単位で行い、参加者が互いの顔を見られる環境づくりが大切である。
- 今後は、区が主体的に事業を行うのではなく、区民の活動をサポートすることが重要であると考ええる。
- SDG s の視点から多文化共生の推進に取り組むためには、外国人が日本で学んだ知識や技術を母国に持ち帰ってもらうという発想や、交流都市などとの国際交流は、行政課題に関するテーマをもって行うという視点が必要である。社会の問題を世界中の人々でどのように解決していくかという問いが、SDG s の取り組みを発展させる方向性のひとつである。

- 地域での交流は、外国の方々にも町会の活動に参加してもらうなどして、地域に住む住民・地域の担い手として扱うべきである。
- 板橋区は交流都市が23区中で1番多い5か国となっている。交流都市からの来賓について、建設関係や教育・高齢者施設視察など、テーマをもって受け入れを行えるとよいのではないか。
- 交流都市との青少年・区民交流をさらに進めていくことが課題であると感じる。写真家や芸術家など、同じ分野で活躍する人同士の交流などを考えていくのはどうか。さらに、このような交流は、一度きりの交流ではなく、継続的な関係を築く必要があると感じる。
- 周年交流を市民交流へ、継続的な発展
- 青少年・教育交流のさらなる促進
- 文化交流のさらなる促進
- 市民交流とボランティア活動のさらなる充実
- 在住外国人の国籍や言語の多様化に対応するため「やさしい日本語」の活用推進
- 日本語学習機会提供のさらなる充実
- 日本語学習のボランティア活動を通じた日本人と外国人の交流促進

■検討テーマ（２）日本語教室とやさしい日本語・多言語対応

委員意見

（評価）

- 児童・生徒など、青少年に対する施策は、比較的充実している。
- 板橋区には、多数の語学ボランティアが存在している。

（課題・意見）

- 多言語対応とは、既存の文書等の言語を翻訳するだけということではない。今あるものを根本から見直し、だれにとっても本当にわかりやすいものを作ることである。
- 外国人が住みやすい区にするために、小中学校・地域・大学の連携を強めることが必要。
- 日本の文化に触れることを通して、日本語を学ぶことができる仕組みづくりが必要。
- 外国人の子どもを対象とする、入学前のオリエンテーションを行ったらどうか。価値観や日本の文化習慣(学校ルール、挨拶、年間行事)などを事前に説明する必要があると思う。
- 外国人に地域の担い手になってもらうには、日本語を理解してもらうことが欠かせない。病気の際など、生活する上での困りごとをサポートできたらよい。
- 行政のサポートが不十分で、ボランティア同士のつながりが希薄と感じるボランティア活動もある。行政とボランティア、またボランティア同士の交流を深めることで、よりよいサービスが期待できる。
- ボランティア活動に関わる区民の数を増やすことが重要である。
- ボランティアに対する敬意を、何らかの形で区から示すことが必要ではないか。
- 外国人に、地域の行事にどの掲示物の多言語対応に課題を感じる。
- 在住外国人の国籍や言語の多様化に対応するため「やさしい日本語」の活用推進。
- 日本語学習機会提供のさらなる充実。
- 日本語学習のボランティア活動を通じた日本人と外国人の交流促進。
- 参加してほしいと思っても、周知することが困難である。

■検討テーマ（３）国際理解教育・多文化理解

委員意見

（評価）

- 小中学生の時に国際交流になじむことで、大学生になってからも、国際交流に対する心理的障壁はなくなると考える。そういう観点からすると、小中学校での国際理解教育というのは評価できる取り組みである。

（課題・意見）

- 多文化共生の人づくりとは、いかに多くの人を巻き込めるかという点にかかっていると感じる。
- 外国人が日本で生活する際にぶつかる壁は、①法律の壁②言葉の壁③心の壁の３つがあると思う。その中でも日本人の中の心の壁を取り除くことが一番重要であると感じるが、一度でも外国人との交流の機会を持つことができれば、心の壁は取り除かれるものだと思う。特に、先入観のない子どもの頃に交流するということが重要である。他国の文化などをありのまま受け入れるということが多文化共生の根幹である。子どもが学ぶ姿を見て、大人の側も、国際交流のあり方について考えさせられるのではないか。
- 華道、茶道、着物など日本古来の文化のみでなく、日本人の日常生活における習慣や考え方、コミュニケーションのコツなどを紹介することを考えてもよいのではないか。
- 「文化」というと着物や茶道など、わかりやすいものをイメージしがちであり、「文化紹介」というと伝統文化の紹介に終始している現状がある。今後、国際理解や多文化共生を進めていくと、日常生活での文化、という視点での文化紹介が必要になってくると思われる。
- 人と人のネットワークがどのように構築されているかということが重要である。行動したいと思いついたときに、頼れる人材がすぐに見つかるような環境づくりをやってはどうか。
- ホームステイ・ホームビジット事業では、日本人が外国人を受け入れるのみならず、外国人が外国人を受け入れるということをしてよいのではないか。
- 外国人同士の横のつながりがあれば、置いて行かれる人もいなくなる。外国人を、同じ国籍や言語のグループへどのように加えていくかということが課題である。それと同時に、外国人グループのリーダー的な存在と区がどのように関係性を構築していくか。一人ひとりに情報を伝えるという発想ではなく、外国人同士のつながりを活用した情報発信も考えていけたらよい。
- 小中学校で、外国人の子どもが増えている。外国人の子どもの側から、日本人の小中学生に自国の文化を紹介するというのはどうか。そうすることで、外国人の子どもに対する具体的なイメージが湧くのではないか。
- 単なる英語学習に留まらず、英語を通じた国際コミュニケーションを主眼に置くという、教員側の意識も必要。

■検討テーマ（４）地域における外国人との共生と災害対策

委員意見

（課題・意見）

- 多文化共生では、自国の文化と他国の文化の違いを客観的に捉えて受け入れるということが重要である。そのためには、まず自国の文化に対する理解を深める必要がある。外国人に日本文化を紹介すると、その魅力を逆に外国人から日本人が教わることも多い。
- 新たな日本づくり、新たな板橋づくりということを考えた時に、外国人から学ぶ面も多いように思われる。お互いに交流しつつ、孤立しないような関係性の構築が求められている。
- 日本人と外国人の交流について、何もないところから、関係性を作り上げることは非常に困難であると考ええる。そういったノウハウをプログラム化できるとよいのではないか。
- 多文化共生に役立つことを何かしたいと思い立ったときに、講師等がすぐ見つかる人材バンクのようなものがあるとよいと考える。人材バンクに登録する際に研修を行うことが必要にはなるが、町会の催しや防災訓練などに、外国人が参加できるような環境づくりなどに役立てられるのではないか。
- 災害対策の考え方として、自助と共助があるが、まずは外国人自らが災害に関する知識を深めることが重要で、それが自助につながる。そのために冊子類を活用することはとてもよいと考える。
- 災害対策は、日々の地域のつながりが重要。そこでは、ボランティアの果たす役割は大きい。ボランティア活動をする区民を増やすことが重要。
- 互いの文化を理解するためには、コミュニケーションが欠かせない。そういった意味で、生活習慣が言語化され、相手に伝わるような工夫が必要になってくる。
- ボランティアや人材バンクについて、外国人の登録が増えていけば、今までとは違う新しいものが生まれるのではないか。
- 外国人との交流の場を作るには、まずテーマを決めるとよい。各国特有の食べ物や特技などを紹介するなど、工夫をする必要がある。
- 日本国内でも、各地域でそれぞれの文化がある。海外にも、地域によって、それぞれの文化がある。そういった違いを、お互いに理解していくことが重要である。
- 日本人が外国人に日本語を教えるのと同時に、外国人が日本人に外国語を教えるという、双方向の関係性があってもよいのではないか。